

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2016年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	社会学	研究科	社会学	専攻
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻 博士課程後期課程3年		筒井 久美子 印		
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名		
	社会学部教授		奥村 隆 印		
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・	人文	・	<input checked="" type="checkbox"/> 社会
			<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
<b>研究課題</b>	宮沢賢治——共同体からの超出／共同体への帰還				
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	社会学研究科社会学専攻 博士課程後期課程3年		筒井 久美子		
<b>研究期間</b>	2016 年度				
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円				

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

宮沢賢治は、社会が要請する役割の演技へと自己を疎外して「大人」になることを拒み続けた。しかし、彼は「大人」たちが作る社会から孤立することも選ばず、「みんな」と共にこの世界を作り変えようとしている。だが、賢治は「みんな」と共に世界を作り変えようとしたからこそ、「みんな」との間に矛盾を抱え込み、しくじり続ける。本研究は、賢治の作品、書簡等や周囲の人々の証言を使って、そのときどきに賢治が「はえある世界を ともにつくらん」と呼びかけた同行者に注目しながら、賢治の「しくじり」の軌跡と構造とを明らかにする。この仕事を通して、「大人」になるのでもなく、社会から孤立するのでもない生き方を示したい。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[宮沢賢治] [同行者] [しくじり]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

宮沢賢治は、社会が要請する役割の演技へと自己を疎外して「大人」になることを拒み続けた。しかし、彼は「大人」たちが作る社会から孤立することも選ばず、「みんな」と共にこの世界を作り変えようとしていた。だが、賢治は「みんな」と共に世界を作り変えようとしたからこそ、「みんな」との間に矛盾を抱え込み、しくじり続ける。本研究は、賢治の作品、書簡、手帳等や周囲の人々の証言を使って、そのときどきに賢治が「はえある世界を ともにつくらん」と呼びかけた同行者に注目しながら、賢治の「しくじり」の軌跡と構造とを明らかにする。この仕事を通して、「大人」になるのではなく、社会から孤立するのでもない生き方を示すことをねらいとしている。

まずは、先行研究および理論枠組みの検討を行った。社会学的視点から賢治を扱ったまとまった研究は見田宗介が執筆した『宮沢賢治』(2001)のみである。見田は賢治の作品や生涯を検討する中で、他者を犠牲にすることでしか生きられないという私たちの生の構造に問いを立てる。そして、このような他者との相剋性は自我が引き寄せたものであり、自我を絶対化する立場を離れば、他者との〈殺し合い〉は〈生かし合い〉の位相から見るができること、また、自我を取り囲む「存在の地の部分」への感受性を獲得すれば自我の解体はむしろ自我からの解放であることを明らかにしていく。見田はこのように自我の絶対化を解除し、他者の相剋性を相乗性へと再定位する方法を描き出していた。しかし、相剋的他者に着目する見田は〈共に行く者〉(見田 2001: 53)としての他者を描いておらず、賢治が「みんな」と共に「飛騰」しようとしたと指摘しながら(見田 2001: 116)、そのために試行錯誤する様を描くことができていない。本研究はこの〈共に行く者〉としての他者に着目し賢治の思考錯誤を描いていくことになる。

次に作田啓一(1981, 1990)の太宰治研究で使われた四象限図式と媒介者概念を理論枠組みとして使用することを確認した。作田(1990)は羞恥論を使った太宰作品の分析により、自己統制の方法を区分した四象限図式(普遍性・個別性、存在・営為を両極とする2軸による四象限図式)を提起し、この四象限図式から普遍性・営為を志向する「芸術家」と個別性・存在を志向する「生活者」という概念を引き出している。普遍性・営為を志向し現在の秩序を乗り越えようとする「芸術家」は、個別性・存在を志向する「生活者」が重要視する他者との調和を破壊する「罪人」であるという対立関係にある。「とがめる媒介者」は調和を破壊する「芸術家」を「生活者」の立場からとがめる存在であり、「許す媒介者」は「生活者」の中で罪の意識を深めた「芸術家」を普遍性・存在の立場から許す存在である(作田 1981)。ただし、本研究では同行者を捉えるために「許す媒介者」の代わりに、主体と共に普遍性・営為を志向する「同行する媒介者」という概念を提起しそれを使用することとした。

先行研究をふまえ本研究では、盛岡高等農林学校(以下、高農)卒業後の賢治の生涯を迷走期、農学校教師時代、羅須地人協会時代、東北砕石工場技師時代の4つの時期に区切って検討を加えた。

「羨望・自律・自尊心——2人の媒介者をめぐって」では、大正7年3月に高農を卒業したのち3年9か月の間、賢治が職業や宗教をめぐって迷走していた時期を扱った。賢治の父・宮沢政次郎は、「みんな」が従っている「哲学」や「道徳」に従って「社会的成功」を目指すことを拒む賢治を「とがめる媒介者」であった。賢治は「社会的成功」という価値に対抗する価値として「絶対真理」を設定し、高農の親友・保阪嘉内とそれを求めることを誓い合う。嘉内は「絶対真理」へ向けて共に歩む「同行する媒介者」となるはずであった。

賢治にとって「絶対真理」を求める方法は法華経信仰であり、政次郎や嘉内に対して法華経への帰依を繰り返し迫っていた。しかし、政次郎はもちろんこと、嘉内もまた賢治の誘いには答えず、故郷を模範農村に変える「農人」活動を始める。一方、賢治自身は「絶対真理」へ向かおうとすると、家族や「みんな」から離れ、家族や「みんな」に合わせようとする「絶対真理」から離れるというジレンマに陥っていた。そのため、「絶対真理」を「みんな」の中で実践していた嘉内に対して、賢治は羨望を向けることになった。

次に大正10年12月から15年3月までの農学校教師時代の賢治の作品世界に焦点を当てた。まず、「2つの別れの教訓——『正しいねがひ』と『たつたもひとつのたましひ』をめぐって」では、2つの別れに注目した。大正10年7月、賢治は嘉内と決別、翌大正11年11月には、信仰を同じくしていた妹・宮沢トシと死別するが、賢治は、「みんな」の幸せを願う一方で、嘉内やトシという単独的な存在に執着するという矛盾を抱えていた。小岩井農場を歩行する中で賢治は、嘉内への執着を捨て、その「さびしさ」を「焚」きながらも、「じぶんとひとと万象といっしょに至上福祉にいたらうとする」「正しいねがひ」を選択する。しかし、トシとの死別を経て、賢治は「みんながカムパネルラ」だという思想へと歩みを進める。四次元空間を想定することで、トシが単独性の水準、「みんな」が普遍性の水準の存在なのではなく、「みんな」は単独的な他者の集まりであるという思想に至り、トシや嘉内という単独的な存在への執着を「みんな」への執着へと拡大したのだ。

『よだか』を地上へ返す方法——『銀河鉄道の夜』第三次稿の検討を通して」では、「銀河鉄道の夜」第三次稿(以下、「銀河鉄道の夜」)を検討することで、賢治がどのような思想によって羅須地人協会活動へと押し出されたのかを確認した。「銀河鉄道の夜」では、自分自身がその中で生きている殺し殺される関係性といかに向き合うかが問題とされる。この問題を検討する中で、「銀河鉄道の夜」に挿入された「蝸の火」の挿話によって、「からだ」は自らが生きていくために他者を犠牲にするものでもあるが、1匹のいたちに1日の命を与えるために使うことができること、さらには「みんな」に「幸せ」をもたらすために使うことができることが明らかにされる。また、3章でも確認した通り、

## 研究成果の概要 つづき

物語の終盤に置かれたブルカニロ博士の解題によって、「友だち」への執着は他者を排除した関係性を作る契機でもあるが、四次元空間を想定すれば「みんなの幸」を願う契機にもなりうることが明らかにされる。この 2 つの発見によって、賢治は「みんなの幸」のために自分の「からだ」を使うという生き方の指針を獲得したと考えられる。

『農学校教師』のジレンマ——花巻農学校教師時代の同僚・生徒たちとの関係性——では農学校教師時代の現実世界の賢治の実践を確認した。この時代の実践もまた、賢治を羅須地人協会活動へと押し出すことになる。賢治にとって農学校教師になることは「芸術家」から離れて「生活者」になることであり、初めのうちは受け入れがたいものであった。また、この時期の賢治は、高農卒業後の迷走期間の嘉内や政次郎との関係性と類似した関係性を農学校の同僚たちとの間で繰り返している。しかし、生徒たちとの演劇実践や夜の散歩などは、賢治を媒介として生徒たちを「芸術家」へと超出させることに成功している。この経験から賢治は 2 つの教訓を引き出したと考えられる。1 つ目が、「生活者」と「芸術家」は対立構造ではなく、「生活者」の先に「芸術家」があるという構造であること、2 つ目が、この構造の中で賢治自身は主体ではなく媒介者の位置を占めることで、人びとを「芸術家」へと主体化することが出来るということである。

しかし、賢治はジレンマに突き当たる。賢治は「立派な農民」になることが正しい生き方であると考えていたが、賢治が農学校教師である限り、自分を媒介として生徒たちを「立派な農民」へと主体化することはできない。しかし、賢治が媒介者として機能したのは、彼が農学校教師だったからであり、農学校教師を辞めれば媒介者として機能する保証はない。しかし、彼は農学校教師を辞め、「本統の百姓」になって「農民劇団」を作ることを決断した。

『本統の百姓』と『地人』——羅須地人協会時代の問題構造——では、大正 15 年 4 月から昭和 3 年夏までの羅須地人協会時代を扱った。この時期の賢治は「本統の百姓」(「生活者」)になり「技術」や「芸術」(「芸術家」)を実践することで、自分を媒介として「生活者」である農民たちを「生活者」の先の「芸術家」である「地人」へ主体化していこうとしていた。しかし、農民は賢治を「本統の百姓」であるとは認めなかった。また、「芸術」には関心がなく、「技術」については、賢治に同行する者もいたものの、嫌悪や反発を向ける者も多く、賢治を「本統の百姓」として認めない理由にもなっていた。

そして、羅須地人協会をつまずかせたのは「自然」であり、挫折させたのは「からだ」であった。「自然」は「技術」を敗北させた。また、農作業に耐えない「からだ」は、発病によって、賢治が「本統の百姓」ではなく「地主の息子」であることをさらけ出し、賢治を実家に戻し病臥療養を強いることで羅須地人協会に終止符を打った。「からだ」は自我の基盤であると同時に「社会的存在の集約」(見田 2001: 234)である。見田(2001)の指摘する通り「からだ」を燃やしつくすことは自我への執着を昇華させ、殺し殺される関係性を生かし生かされる関係性へと転化する取り組みであったが、実際は「地主の息子」と農民という関係の絶対性を再認する結果となっていた。

『生活者』と『地人』の間で——病床と東北砕石工場技師の時代——では、羅須地人協会後の病床期と昭和 6 年 2 月から 9 月の東北砕石工場技師時代を扱った。賢治は実家で病臥療養しながら、羅須地人協会時代を振り返り 2 つの問題を引き出していた。1 つ目が日本的共同体の支配原理である「恩愛の両義性」(見田 2001)であった。「生活者」である「家族」の恩愛を抑圧としてこれに対すれば「〈忘恩〉の徒」となり、恩愛に報いれば抑圧にこびへつらう「〈諂曲〉の徒」となるというこの両義性を、「家族」だけではなく「みんな」に幸をもたらそうとした羅須地人協会活動は乗り越える可能性を持っていた。しかし、それに挫折した今、賢治はただの「忘恩の徒」となっていた。2 つ目が、理想と現実のギャップであった。「みんな」と一緒に「地人」となるという理想を現実に根付かせる方法が賢治自身にもまだわかっていなかった。

病気が回復し、賢治は昭和 6 年 2 月から東北砕石工場技師の仕事始める。賢治にとってこの仕事は、政次郎と東北砕石工場の工場長・鈴木東蔵に保証される形で、「生活者」と「地人」、理想と現実の結節点に位置付けられ、羅須地人協会が抱えた 2 つの問題を乗り越える可能性を持つものであった。しかし、賢治は技師の仕事に全力で取り組みながらも、自分が目指していた「地人」の立場と比較し、現在の自分は「落魄」したのではないか、「屈撓」(屈服すること)したのではないかと悩み、他方で「妻」も「家」もない自分は「生活者」としても半人前で孤独な存在であると痛感していた。同年 9 月、賢治は工場製品の売り込みのために上京するとすぐに発熱、再び実家で病臥することになったが、この頃使われていた手帳には、「生活者」と「地人」とがすれ違ってしまう無念さが書き込まれていた。

農学校教師時代の教え子などに宛てた手紙からは、その後も賢治は「立願」を果たすことを諦めておらず、「やっきとなって」そのための準備も進めていた。賢治が最後に至った地点はどこだったのか、現在、検討を進めているところである。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

筒井久美子、「羨望・自律・自尊心——宮沢賢治と2人の媒介者をめぐって」、『語りの地平——ライフストーリー研究』、創刊号、2016、27-48

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

学会発表

「羨望・自律・マゾヒズム——宮沢賢治の2つの欲望をめぐって」、関東社会学会大会、上智大学、2016年6月4日